湖月抄
二十

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

槿 細 巻ノ名ハ哥ニ詞をそへて号ス 哥にハみしおり
の露わすられぬあさがほの花のさかりハすぎやしぬらん
ハかれたる花どもの中にあさがほのこれかれにはひまつ
はれてとあり 孟 源氏卅二歳九月より冬までの事あり
薄雲の巻の末と同年なり 岷江入楚 細 嘆同

閻魔庵図書部

岡本蔵書記

斎院ハ御ぶくにて 細 薄雲
の巻の末に式部卿の宮うせ
給ひぬればおりゐ給ふべし
河海に延喜の帝の御子
のうちにひきうけ准拠の例
あるなり 斎院ハ一代に一度
に服あれハおり給ふ代替に
ハかハらざりし 師 此斎院
ハ帝の御子の比より源の
宮の娘にあたり御服の
ことに斎院に立給ひて落
に父の服にてかくおりゐ給ひし
也 此巻ハ斎院の事を始めつゞき
し事 孟 源の此巻にそふて
心を寄せてまつるハ御癖也
わが源のおもふ事をさりげなくの
ことのさま
源のたえぬ思ひのさきをもとむ
つれ 斎院ハ心をよく
とまらぬ人を文をも槿の前
斎院又桃園式部卿の宮女五ノ
宮 三ノ宮も桃園にて 薄雲ノ巻之

斎院は御ぶくにておりゐ給ひにきかし。(源氏之)おとゞ
れいのおぼしそめつる事たえぬ御くせにて
御とぶらひなどいとしげう聞え給ふ。(文宣のこれまでのことより源氏のきこえ)
宮わづらはしかりし事をおぼせば
御返りもうちとけてきこえ給はず。(槿斎院の心也)
いとくちおしとおぼしわたる。(細 源の御心也)
なが月になりて(桃園)もゝぞのゝ宮にわたり給ひぬるをきゝて
女五の宮の(槿のおば)そこにおはすれば
そなたの御とぶらひに(女五の宮の方へ)ことづけて(細 相つかへの御門也)
まうで給ふ。こ院の此御子たちをば心ことに
やんごとなく思ひきこえ給へりしかば今も
したしくつぎつぎにきこえかはし給ふめり。おなじ
しんでんのにしひんがしにぞすみ給ひける。

るゝ月よまりてうぐすの文 細 宣耀殿よさりあふ御よ女御とおりまいて光世不よまうしくて諸

よ桃園文よううつりまふとみぐらり桃園ハ今の仏心寺の跡也 兼日記 桃園ハ在二一条ノ北大宮

西一条ノ南中 許世尊寺ノ南師氏大納言ノ宅也 保光中納言 代明親王男 傳領 仍テ号ス桃園中納言ト

今案 敦固親王ノ亨ス延喜帝ノ御連枝 并ニ九月ニ薨ス 敦慶ノ亨等相似 抄 二ノ宮共ア々敦固寛平十二年四

御子 母ハ延喜三月ニ 延長五年九月七日ニ薨ス 河大和物語ニ云桃園ノ兵部卿ノ宮うせ給ひてそのと九月晦日

みつ給ひよゝりしこの少方よまりるり 抄 かりくの秋のくそしぐるゝ々のぬぐいにぞらぬ其

らうんくん 拾遺集ニ桃園ニ住侍りける前斎院屏風ニ書きたる ゆふのいもが衣手に春花々とそう

ともうるそしくぬゐり

女御の 細 式部卿宮の御母女御也 孟 斎院の伯母なり

このとこりより 抄 女御よりのるすと桐壺帝のみこそうによせしれりくるかわり

今とそらしく 細 源氏の事をいしく大旨に思ひ給ふ 孟 相続して源の同じまふなり

ゆゑのしんぼ 細 桃園の東の方に女御の文住給ふ 師 女御ハ東様ハ西に住まふなり

後まかくわまよりし 細 式部卿宮薨し給ひて後も虚さうにあれいらさ後哀くうちうけよさひ

くとかうら給ゆても々しなるゝ者ハ追ねりなり

このとこに桃の文とそれとこ御とのこ女ハ 花宴の上の御母ハ三

宮桃園の文ハ女五ノ宮其こ三の

宮ことぬくり 細 三の宮ノ姜と

の母宮ハ此女の文まりハ年

まかりまへたるらくハこの文九

ゆふかなり

よあつくあれよりらって、哀よけらひ給ふあり

細 女御々く

るすり。そや気い光んしまて、(源よ之)心あ後せ文給ひて

年ませふ々敦く

かりめきさらうれけらひ給ひ志賀かくさうらこおあく

をこのそよはそぞれど。(たゞ大臣と)相せよの(抄 それよ)くまやゐ

わらまわしくうりがくてこ後き侍るちとおりて

しおひてうはまうじくく数ハこと

孟 大フツチ くうらぐ 数 ハこと

ぐしうこ ヤトト五音通ズル之

ヅユン 経 骨々く

まくそまり 抄 葵上母宮ハ

源のうり姑うぞ 細 くうれ宮ハ

是 賢 ま思ひまふ為又云是

ハ後段の少方に そまらぬ 花

やうよりそあさそれしへ之此女

ハりそうま女ゐめけしくてをを

皿まされハそれとさうゐゐ之

とゐふ

うしくも 細 源のけんの中に

御年の宮さうすとそひ

まつく

海くまつまそおみし世の

おそとくく別の世おにらう

うやううかうとく

しやくゆわや御り

細 路の京しくくハ文政たよ

除るかきとくし

似ぬとそくるし

くるれば思ひ入くまよ、らうじくらうくゆかれし御

細 桐壺の帝く女御更衣の御へ

つるもうらうらとけら、後の人々くれまて後よ

うぐんおそく光て給りつゝよそのつか御

ましいとまうらうらそとそくし給ふとこの

細 式部の御く

とやさんくらうとをそまへれぞいやよくさうあさ

るとそまり給ふとどくさうらまりとう世給よ

世のさとさとをうく

かんりのとそれしめく給ふとさて給し

うくとうりまゐるれと思へと折りしくりけりて、

細 光よりほの御く

後うれまそぬいさ海くまつけて世の下世のや

細 後の女く 抄 身よ云ぬ罪く

うらも給ふく、おそしねつまよあそうり給ひて、

おしぬうよましひ給ひしと、海くゆかや

けるかどまへつれなりてハまくうりそくり

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

源と聞くくさまりうきうつなり

三条うしやしく
細菱さの母文とのうり
暁三文源氏をしこ
盃うつきゆうとい源氏
とむこうてき給いうやう
うしきとく
いうせ給あり細武アやあ
檀歌流と源よ嫁しうき
中ひうり給うく花も
人とまてそのうひ
とうううのうく
をうしうあり給細文
の女文のお給しまみうく
めくさこうもみうに給
うれの女流のうとく
きあはみくとくめうく
うれうしるく細
うしるとうり所あき
うの狄流のつれうくう
まうくまをゆうくうのうこと
思いうくやきあく

楼

人うとおいおうとれうせのうげうこうる
ああゆうらうう先うるうあく
らやうしくうろぐこれゆうらうそひく
くうそまうりうようろうやこうぱうう
まのめうもやうう梅ほのう
うしうとの給うまでうう
うしめりげうう楼よんうろあく
ほうをうやうとうれうをまてと
うろぐくもこうれうしうう細狄流のれ方く
うれうしるとうり所あき
うの狄流のつれうくう
まうくまをゆうくうのうこと
思いうくやきあく

ものこうりうううの
狄流ものとうり流流をの
こい資みくものとい縫糸之
狄資さこ狄盃ものとう
ものことうううかあり
不用しものといものの
さるうひうくさて
うひうきのうて
細只今服着うううよう
てこ花鳥服着の流れ
籠のうりうにて
みびうの布と用こうき
本こ八帳のまあり
みくまうあらでんう
うくうこ八当もみびう
今うこんうくくうき
細籠中へも入ぐうきの
とあうこうそうき
もの給
神さひよろ細源のを
け給うの年久あう
うく和秋久くうう
とい年月のうろと源氏
のの沢名墓の芳とい

狄流のうりうううの
狄流ものとうり流流をの
こい資みくものとい縫糸之
狄資さこ狄盃ものとう
ものことうううかあり
不用しものといものの
さるうひうくさて
うひうきのうて
細只今服着うううよう
てこ花鳥服着の流れ
籠のうりうにて
みびうの布と用こうき
本こ八帳のまあり
みくまうあらでんう
うくうこ八当もみびう
今うこんうくくうき
細籠中へも入ぐうきの
とあうこうそうき
もの給
神さひよろ細源のを
け給うの年久あう
うく和秋久くうう
とい年月のうろと源氏
のの沢名墓の芳とい

ゆうくうきうきうう
みううのうううう
ざうきうやうう
うきうやうう
義よそのうう
あうくうう
うのひうくうよいう
出をうそこうそうう
うらうすうきうう
月のうううぐう

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

河 神閑(カミサビ) 神翁 閑雅

ありし世はみな夢に見なしてよ

細 内よりの女五宮之 弄 斎院

斎院の給へ人侍るそ也花文

宮のこと 盃月 面白きさ

候之云々

らうなどは 細 年月の労

みしくわらひ知らるゝと

けれどこそさだめかたきに

細 源の身上以下何事も

不定なる也

人しれず 細 年月は斎院

またまはでぬいで 心かせ

のかしとも思ひ給ぬと只

とは神ゝ給しとゆへるを神

のゆるしとはいへるなるや

ここらつれなきとは源ぞ

くらきうき世をすぐす也

よそのつき 斎院とは

わきて年をへて本意

よく堪忍して有つるを述

今はなにのいさめ 細 今は

つけのふべき事もしなきを

しめきをかけると也

ゆるさせ給てんとぞたのみ侍けるとておもすお

ありし世はみな夢に見なしていまな

むさめてはかなきにやとおもひたまへさだめ

がたく侍るにらうなどはしづかにやさだめきこえ

させすべう侍らんとぞきこえ給へり。

源心へ げにこそさだめがたき世なれとはかなき

ことにつけてもおぼしつゞけらる

源歌 人しれず神のゆるしを待しまにここら

つれなき世をすぐすかな。今はなにのいさめ 源の詞也

にかかこたせ給はんとすらん。なべて世にわづ

らはしきことさへ侍しのちさまざまに思

給へあつめしかな。いかでかたはしをだにとめ

よき物なき也 弄 斎院行りぬ給われいつきめこと わろしとの給へ

なくて世にまじらひし 細 源ハ斎院しるしを 抄 槿ハ斎院に坊へし源之そまのかわなに名を

の後久しく物思ひつゝなくてとめりけるとのすゝむるにおもひをつくしまゐらせへ

かこつよしとよ 細 人はおもしろくてせうとかやのらへ

まくしまして 細 源の富貴

ことに具して君給へる位に

至ハ年ころくみらる給さまに

らふ人くのさへ花さかし

まふハ給ひるつもふへ位

の事くハ源氏の時に内大臣

世大臣なとハ給ふよとそ

よそさるからこそなるするを

この世ハ給ひなるともふと

ハ云ふなるいかくまゐらし

きうこまゐつるとよふ位

給ぬハあなと云し

なべて世の 細 斎院の此歌ハ

之世中の哀さるをと云へ

給とも神ハ苦からまじ

にゆるしありもしなくて

閣ヲ云るの給へ歌之意

て世のことをとふとも神

いさめんと斎院のいふ給之

ところの風に 細 河海にえ

細 源の身ことを述る也 あながちにきこえ給。御よういなどもむかしより

も今すこしなまめかしきけさへそひ給へり

さるはいといたうすぐし給へど御くらゐ

のほどにはあはざめり

槿歌 なべて世のあはればかりをとふからにちかひ

しことを神やいさめん。とあれば あな心うそ 細 源ノ詞也

のよのつみはみなしなとの風にたぐへてき

との給ふあいぎやうもこよなし。かごとをさ神 女房

はいかゞ侍りけんなどはかなきことをきこゆるも

ことも、まめやかにはいとかたはらいたし 槿の心也

えうり東南の風をとつて稜の句(?)又一切の穢氣を祓除の義也。其(?)後(?)によりて俗(?)に此語を用(?)ゆ(?)

とりは(?)志なとの風にまかせよりさすらへ給ふ(?)大海のそこ(?)に

八重雲(ヤヘクモ)於(ニ)吹(フキ)放(ハナツ)事(コト)乃(ノ)如(ゴト)又云(イフ)先代舊事本記云伊弉諾(イザナギ)尊曰我所生(ウメル)國唯有(アリ)朝霧(アサギリ)而(テ)薫(カホリ)滿(ミツ)矣乃(スナハチ)吹(フキ)撥(ハラフ)之(ノ)氣(イキ)化(ナル)為(ト)神(カミ)是(コレヲ)謂(イフ)風神(カゼノカミ)也神名級長津彦(シナツヒコ)命(ノミコト)次(ニ)級長戸邊(シナトベ)神

師 祓殿にかゝりて(?)せし内にも男女の道をもとめし罪もあるべし。今(?)そのありぬることをつみにまぬかれ(?)

ふくひのつれづれなれは源氏のひきこもりし(?)しのびてのよし

んそうさを祢(?)ハ 細 源の君(?)の(?)志也ぞのみさだを祢ハ(?)おすしうく人をまうす(?)罪(?)かゝしそ(?)人を

まもらく(?)ハ罪かゝしとも(?)かららん(?)之 異日(?)一説(?)所 義ぞさを祢ハとよりよ(?)(?)宣旨(?)なと新院

へ中(?)将(?)に源氏の心(?)からでくるしき(?)ものゝ(?)のもろもとがらう(?)心(?)恋(?)のは後(?)ぞ祢もうあまた

もとより(?)これハ(?)なくとかうかる(?)からもとへもしも斎院(?)のほど宣旨(?)なられいまきやゝるハ

やめ(?)へらう(?)つらつらしとも(?)く

せつなねいきのよ(?) 細 此斎院ハ今(?)のうらく人はかくひと方(?)のかたにいたらしあり

つんまりかやゆり

細 まふらふ(?)くのつんまり なやむ(?)しおかし斎院のこぶ うくのゝかたぬるを女房

のいりくとをくし

すさくししさやうよ

細 今称(?)ハ人の(?)の(?)心と(?)

て立(?)給ふとし

せかうらぬやうきを 細 源氏

根(?)まえる(?)斎(?)くうつしたる(?)君かく門(?)

今(?)その(?)御出(?)てみるよまきる

人のかたれかするこどせめて

ねはありし夜ほとし月はなくてもほかく乃

そひきいりあて心(?)とこうしり(?)ぬるなどを

なりまやむかり。すずくしとやうよおわりね

お 源(?)羽(?)とわり(?)の君(?)のことのあひく

ふかとるしいおきて(?)なるし(?)られうらうすげきて

源の羽(?)く

うち給ふ(?)よそ(?)ひのつりり(?)せは、おほえそく(?)と

そなかう(?)わゝ(?)ぬ(?)れしよ(?)まいをぬやうれとい

見(?)とゝりの(?)まうしとく 師 よも(?)うぬやつ(?)きとハいかしうき(?)給(?)のとの(?)かくく(?)(?)心(?)あさく

人の(?)さまらかもくるこそとしも(?)よ(?)くらる(?)ほそうよ(?)きつぬやつさ(?)と(?)のかくり(?)今(?)そ(?)ありいそく見

おとやうへやうしもう(?)さきまて(?)としもうへ(?)しらひきかとうく(?)とうつ(?)羽(?)く

とらへして 細 無(?)給(?)之

細 斎院(?)ふく(?)おしまれ(?)時(?)よ

やうりし給しこへとを(?)宗(?)(?)給

之おしむ(?)しこうり源の(?)かく(?)

や通ひ(?)かひしことを斎院の

女房たちの(?)あひて(?)ろ(?)ふる(?)しき(?)同(?)

おもうりのこれりき(?)よ

細 九月花(?)月(?)之 孟(?)樺(?)のこと

おもしろく書(?)せるさ(?)まるひ

と(?)ハ(?)文(?)の(?)ことの(?)文の(?)白(?)之(?)書(?)狀(?)

まぞとゝまさしさすへくやそひ。まそ(?)なし給

ひかりとそ。出(?)給ひるかり。所(?)をさきまて例のさ

細 さふらふ人くの(?)そ(?)さく(?)く(?)そ

ことあつり。九月ばかりのこと(?)もおかしき月(?)ども(?)よ。

細 九月ばかりのこと

本(?)の楽(?)の(?)音(?)なるかひまつけるくもとさきめし(?)すの

けしき(?)よくそ(?)へしつゝその物(?)かう(?)し(?)くしくを

表(?)みとふかうえて給しはらぞ(?)なるとも(?)は

細 花(?)ハ源の(?)いらへし(?)

ひ出(?)たてさせ給ふ。やがてなかめてうちながめ給ぬ

ふかいのりてねさあからよ給ひしつゝけし事。

播(?)まもあらそ(?)

とく(?)こりうし(?)まいくをあそひ(?)網(?)寄(?)ぞとおかぬ。

かれふう(?)(?)とも(?)の中(?)よ。あさうかのこられかれ

なれハ前まさ紀さらやうにもなくその女もあさりなきうよみてさるべし
あざやかなりし 細 以下源よ
里の女の句なり。よそくしく篠のあまさふくひしも
面目なきやうなれど。わすれ
がこさふりよわされてや
作しくて 盃 あざやか同心歟
こしおりの 細 源のあなうら
よみたりしかふそれハなる
まじくも 樓なりまして第
木堂にいひしえ。そのかゝれ
なるをいふ。下句のなん
樓の花盤ハ有どなきものなり
なりと表とせべき由之心
ハ無なんとを急ぐ由之
解 源氏のあふすといそき
あふ心之 抄 無ふすいつか
といりとなくせふ心を面白
し
何ハなど 細 やうよやもろ
ハいくおわぐらんとて鶯
の義ありいく 抄 うつハとハ年

まとひゆかれて。おろかなるさうよさきて。
盃 女のなるべし
旬ひもことよりたれるをゆしをまて生れ
奇隠へ
給。けざやかなりし出りてなしよ。人をろ
文句
きこゝろし待りて。うしろでもいとしい
がれらんじ。ろんとねうくされど
源氏
こしおりの家まもられぬあさがおのれ
のさりハ是やしぬらんどしごろの川もり
も表とさりハさるとも捨ししるらん
やとなん。かつハなるとさしまへ里をとなび
花すなりらんハ物をと
こまへ家出ふとのこゝろどへよ捨つるなり
らんもこしらぬやうよやと捨しハ。ハぐ
花すあれとこゝ いりすと
もれしぐりうりまうなひてきこゝ也れハ

ころのんさしの程をさりとも捨ししるらんとりつハそふとらふ義之
をしるすひさう 細 家れさ海のまくよりなりなるよ出えしをしまふ之 師 さのこ面ヲモテ 鶯想ケサウ ざら
さう文なるねんとて
秋をてて 細 家れさしむき
ての面ゆりを表て花をす
とし給えうつハうつろ也
ふうよ用さうハやれなり
え 抄 秋もしらうこゝろ雪
のまくきよあうなるさう
ようろひさうあさうれ乃
さ海を推ゆりまへとて
まうりしき 細 今拘ゆりひ
の内なるよ盛者必衰のこ
とゆりもしひよそへられ
て表なるよして花の盛ん
是やしぬらんとあるも吾
身の衰へ行ありさ海より
例つりしきとしりなし給
え 花鳥 樓ハたるなき花之
さてまつりしき出よそへ
とハ秋院の出花をすにう
きまり家まくのことハ
出世の中なれハ家なく神
をうらわしをよしせ云く

樓云 秋をてて雪のゆがきよ
ひきがれあり
かなきうようつうあさがれ。
樓の花をすの句之
よそへよつけくも。家なくとのこあるハなよ
のおりしきふしをるきを。いかるうよりをさ
がうくれらんどめり。あなまびのこれな
服者なれたえんあり紙之
よびうるうもみつきはしをおりしくこ也
めり。人の出程。かきさ海などよつくろ
まつて。その出りハへをなきことも。つきぐ
しうまひなるをはほくゆがむこと
をあめれバこそ。さうしらよりきまさら
りしつて。光へくるきことも捨りなり。

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

なふのおりしき 細 いつくにゆかしきふしのこりるすもなきをあられは只給へ
人の御程 細 茅子地へうやうの贈答なと人の程くよあしく誇りなしてあしき
ことをあらはしきれハ無ありとしつるすも侍よりうり侍へくさしもなきことのあ
なしこれも世るのをしへ 仰 是ハ凡て贈答の奇なとハ其人の位又ハ出さ海ふくも
商度ハ何の難もなくみやうすもあるをそれをつきくしくまゐびてそんとまうに
ハわくゆかみてよろしからぬ事もあるをそれをしきよまゐひなきうし柄のまけ
ゆわつるなきすゆわきとくゆかむとハ其四方なる柄のゆかむごとくにつこなきす
すもまゐひなきよハゆかむすあるとく
立かつり今さらく 細 只今ハ何あらぬやうにまも
ひまへどりとく
りてはなれぬ 細 秋陰乃
源ハ一向よハりてはなれ
ぞ又なるどハかつし給へ 曉
さらかつり 細 今より後り
さらこゝろなり
ふふ姫人くの
細 秋陰よさふふ姫女房
なり
さしをあらぬきハの
御 源なるぬ人ハもなびく
べき事のふかろき女房な
どハ此源のすをよしになく
めでたしまろうとあやま

御 源ふかへ
さらかつりいまさしまかくしれハ
がきなしも。ゆけなきことくゆかをどなを
かく昔よりりてはなれぬ御氣色なから
源ハ逢ぬなるへ
らかしくてるよりをしひつ。えやむま
じく笑さられハさらかつりてまめやうま
細 二条院へ
ゆし給。ゆへりしのこのよはなれかたして。
細 源の語ひまつへ
をむじをひへつくしひ給。さふふ姫人こ
のさしをあらぬきこのことをさふ。なひき

ちりとハこなたよりもひ
かちん程よしつくとく
文ハそのうえ
細 源も文を年ゆくまし
しまつ時さふもつまなく
てる給し地をとく 仰 文
とハ樓の斎院をさし
今ハまして是もしひなる
へき 御 樓も源もはよりひ
もわかりぬふしいよく
しひはなれまふへしひな
うへきとハかやうのす思
ひなきふつきすをわ
をとこ云ふ
なるなきまゐまつけたる
仰 凡流めうぬ文なとハ返
すなともあらしをそれ
をかくしくや人のとり
なさんとのそ思ありて
それさへらしとゆわを
とく
かりかくく 御 かやうにゆる
しき海よつまるさうら
源も心のしまるへ

やをなりなどハあやまちをしけ無くめ
できしゆれどこやハそのうえごよ。こゝよ
くゆかしきなれたりしを今ハまして
れをしひなるべきはよりひ見てゆへ
なきまゐまつけたるはかくりなど乃た
つをぐさぬもうぐしくやとりなき
なしんなど人のもれいひをたゞかり給
つ。うちとけまづきは氣色をなけまだ。
かりかくゆなじさ海なるはふぐへをこの
人よりめつしまくをねてもしひ
ゆへし給。世中よりゆへしを。前秋院（せんさいゐん）より
わんじよきこゝ給へバるん。女の文などよ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

ひうきやすさいぞ
らどこれもの
るべ
くそびよく
ねよ
世のあるごみもぬり
せのいろめも
とうつをそ
り

伝寿
いつのまも
雪ふる里をあれ



こゑくしこのそて
細かにおくおかく
花ぐさのかうをし
ぐぐ
細口の鑰のくらてさび
つくし 行以 馬師
生易 駿用 緒 仰 鎖 滝難
岡 白 楽天
きのふりふるぐと思よ
ここせのあるこ
細き長紙半ここせのわ
そくしおり松葉 スヒニダ
ここせこそのゆふ八源氏
今年此一巻く春の明
くるのもうぐと思よ
くやれ年さここにかめ
しるとおく 天文二九月講こと
仰 これまでの文のくれて休
所のいつもわれうつけく
光陰のうつやくねのあり
春ぬりやきこせとんろも



ろと夜ふもはてあさなきをこまやかとやそんや 盃 長紙よハここととせもく 何四年う
ここせとあり 源氏 花宴 ここここせハ三十巻こ源氏一巻こて世こ源氏の海義多こと
せこあり 花源氏花七巻もあるより初へうりあるこ
ここせのあるこことハいるハ方久こきまこハ
ことせのまこ 細世の義をそり
いつのまも
やうひうくしうう
所への鎖のすくのそうひ
とハのこまうふ
れそうこしせうう
少源氏 櫛のうへこやく
ゆきこうくなどをゆう
れ年ふようくめく



いびさこう 明 源ふこ
ひきの弦 盃 吸 鬼 絵之

ひうきやすさいぞ 源ふこ
らどこれもの 源ふこ
るべ 源ふこ
くそびよく 源ふこ
ねよ 源ふこ
世のあるごみもぬり 源ふこ
せのいろめも 源ふこ
とうつをそ 源ふこ
り 源ふこ

伝寿 源ふこ
いつのまも 源ふこ
雪ふる里をあれ 源ふこ



細女ふこ
そやのれうこ
が女ふこの為う
ふりうこ

源の心
もれうこ
女房詞
えいうこ
源ふこ早く無名抄ふこ
ここよ 源ふこ
ここよ 源ふこ



国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

かしこけれど　細 我をたえて
ぬ老人の詞也　師 源内侍
の詞に思ふらくて位スヘ
とえるを源のまりとも
此あひんとおもひしに源にも
おほしもしまたはへらぬ
しらずと恨る詞也
院のうへは
桐壺の帝の御事也

しはぶきうちして。まゐれる人あり。かしこ
けれど。きこしめしたらんとたのみきこえさ
するを。世にある物ともかずまへさせ
給はぬになん。院のうへは。おばおとゞとわら　細 おほきみさり　祖母殿と云也
はせ給ひしなど。なのり出るにぞおぼし　源の心
出る。源内侍のすけといひし人は。あまに
なりて。この宮の御弟子にておこなふと　かくより源の心中よ思ひめぐらし給ふとなり
きゝしかど。いままであらんともたづねしり
給はざりつるを。あさましうなりぬ。その世の　細 源詞也
ことは。みなむかしがたりになりゆくを
はるかに思ひ出るもこゝろぼそきに。うれし　帝の御代のこと
き御こゑかな。おやなしにふせる旅人と

その世のことは
細 源内侍をさして尾なれど
いふ也 出家の後は男
女ともに家人と定めて
身子と[illegible]
[illegible]
細 源氏は今親りなしよの
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おやなしにふせる旅人
[illegible]
山のいひにうゑて[illegible]
人あはれやなし
ひしきを
細 [illegible]
よ今は人の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
源内侍親身の老を[illegible]
して源の[illegible]
と[illegible]一部源内侍
の年の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

はぐくみ給へかしとて。よりゐたるけ　細 老者の
はひに。いとゞ昔思ひ出つゝ。ふりがたくなま　源内侍のさま也
めかしきさまにもてなして。いたうすぼめ
たる口つき思ひやらるゝこはづかひの　歯落て口すぼめたるさまなり
さすがにしたつきにて。うちざれんとは
なほおもへり。いひこしほどになどきこえ
かゝるまばゆさよ。今しもきたるおいのやうに　細 [illegible]
などほゝゑまれ給ふものから。ひきかへこれ　南説
もあはれなり。このさかりにいどみし女御更
衣。あるはひたすらなくなり。あるはかひ
なくて。はかなき世にさすらふも
あべかめり。入道の宮などの御よはひよ。

愚按此段のうち細流の注説を引かへまうけての義之 花鳥の注説を引かへよくひかへけしての
義也このむねをこゝろえてよむべし ひくらしゆかしきなり 源内侍ハ紅葉賀巻に年五十七八と云り
今ハ七十あまり成べし 源氏ハ卅一歳也 細 今文に見えたる老のやうに源内侍ハ思ふらんと也 老ハりくつよりの老なりのめを
いまいましきさま 源内侍若き年としての人も我れにまさる老の事をもかくみるそと物かたらしくかくも思ふらんと也
このさかりに 細 源内侍の年ざかりの女御更衣の事
くさなしとなり
入道の宮などの 細 藤壺也 ちゞにいさゝか罕にをとらず給ふハ世ハ不定之 源内侍はかく
しらへて作りたまや
年のほど身のゝこりすくなく 源内侍ハ老者
うけきよ
て今のおりもなくなげかる
頼あつかひもしらぬも
めぐらるゝ人の命を
しへてとどめて
あるハひともろともぬ世なり
しく
ものあはれなる 細 世中の事を
と表しきつるすぢなる也
源内侍ハ若き身のよし思ひ詞
も老のかを思はれざるゝを也
心ときめき 細 内侍の年を
いふぞかしいとのしめでた
わかやぐ 紅葉賀
にてハ花
ひでよし宮子のみにハおく
ねびたる人 花 物のゆゑさとき
まいれはゆやのおもやんは
いとこの実ハ見えりおとゞ
とひかさ 細 すぐさめての給
君とうへて
と後世まで親をおもろし
まいるるかゝる 孟この世と
たゞよろこびかり御世
よて八句嫡親をハ忘れもしき
とかり
ひと間ふた間
細 古今文の貞女也いとひ
かかすもしおりめく
ありつるおいらく 花 源内侍
の心げさうにまつそとそり
とりも又月さしおいてとよま
あれハ師走の月夜ににかみ
「ていひろく」細 河海に枕草
ますさまじきもの おうなの化粧
さうじものゝ月夜とあり
但當時流布の枕草子に
はなし 他本にあるにや
今但清少納言文元備り部に

あさましとのみおぼさるゝに年のほど
身のゝこりすくなげさに心ばへなども物
はかなく見えし人のいきとまりてのど
やかにおこなひをもうちすぐしけるは
なほすべてさだめなき世なりとおぼすに
ものあはれなる御けしきを心ときめき
に思ひてわかやぐ
内侍
年ふれどこの契こそわすられね親の
親とかいひしひとことゝきこゆれば うと
ましくて
源
身をかへて後もまちみよこの世にて親を
わするゝためしありやと たのもしき
ちぎりぞや いまのどかにぞきこえさすべきとて
たち給ひぬ 西おもてには御かうし
まいりたれどいとひきこえがほならん
もいかゞとて ひとまふたまはおろさず
月さし出てうす
らかにつもれる雪のひかりあひて
なかなかいとおもしろき夜のさまなり
ありつる老らくの心げさうもよからぬ
ものゝよのたとひとかきゝし

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

いさかくてやりわかしてん冬の月雲の花にもぬらしらざりけりと冬の月をせらしたる
そこをしけるの多くして冷しき物に云なきんはいかゞと云ふ。又此雲の奥にこゝ出すなり
えたり。皇が網同奥に河海にみたり師細の法歌如此 師雲の月の冷しきすは小野宮の
日記河海に引かつり。奥にあり嫗の歌さうのるにこゝに松茶にまたり。ひきあわせていふる
けるへし

しいでられて おもしくなん。源の実にはしかれ ひはいとゆかめ
やうまきてしまて。ひとこと あくしなどこと
人づてなしその給ひをんと思ひ給ふ
ふきをんと。かりしらてをめきてしまへと。
ひきすら源切にのまふく
細秋陸の法心 師 それは樺人は源に
ひし秋も人をまりやうまへてゆうされたり
し世まうに。古文なとのふまをぬがしたり
しと。秋わかやじくたへかしと思ひ出のして
やまふしとこの思ひをさぐ。つきなき
細 蜜 ふくらん 孟 年ふこうらん
ほとふく。ひとこと思ひといとまばゆかりしん
とぬかしくさしまうどきなれ

つまるさをひかしに
おつまるさはひかしらしらす
くそれにうりぬるらふ人
のつくさにそへてつもしと
ふづらのと 細 河海引
わかくこ得れどさして不可
只宮男のふつくと云る
なるべし 無しさも ふづ
らのまざるれば無所なく
もそそまづらふ 河海三首
の内可用之歟 孟心 日本紀
わらふめて 細 秋陸の具
なるふをおとよおくあ
てはいかにして用つきそとこ
人のよにくさやうに改ひ

細 源の心
ば。おさましうつくしと思ひきこゝ給。さて
細 こもそはうざらさ海にて給
がよはしたるなく。さしたるならてなどはあら
ぬ。人つくのはかへりなどぞふやましきや。
和をいくうふ。風のけるひたげ
細 滅の字面白し
しくて。おくしまいとものふがそ、そ也
まはざ海よきほとよ 孟 源の様とこ
のごひまて
源方
つまるさ代芳にこりぬふこそ人の法
らさまそへくつくまれ。こゝろ川かしとの
細 さうらふ人そのふこ
まひをさふるを。げまくさちしいうしとへぐ
まいのきこ也
樺方
わしらしあてなまりたまえんひとのこへり
細 我は菅にかつらはるさと
うろときくしこゝろがちりを。じりしにかつ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

へ[illegible]も宝有なとしてはかく 愚案 好色のはかく
年比よつくはらつき 細 好色もその[illegible]
そのこそあるくすこし[illegible]
まかり給ふんの心づかひ[illegible]
はひとつひとつ 細 おもふしまいぶ[illegible]
好色ひとつしひ給へ
おくりまめりしき
細 好色の心づかひやうし
くさぐさきらく
世の人の口さがなさを
孟 源の心ざうけまふより
てう御とり人さらとんて
のりん給ふて[illegible]也
されどはん中まかん事
よ給ふて
はらかくし 細 交野少将
え[illegible]人もはかなきろ
べし[illegible]とりぐにて
ひうびまかねるるべし
[illegible]はかくのはかまさ
とかまの事よ[illegible]みえ
はまちのそれあつりめと
[illegible]物語よ[illegible]
かし

ハ坊にもそしはえふかうまじきとし
とりそくされわすあるんもすくい
まめしきやうよもして人のとり
あさじやうとどよの人乃くらさうかの給が
しうめしりばかりいきふうと御人はも
とけ給をばいでうかんつひしまひつくや
うくはなとさすひとのとし給はばかく
のさんざらあやさりのしまへど御にけ 細 別腹
たゞまねばいでとうともくさやのうち

細 源を移て[illegible]
細 同[illegible]
細 光る源氏君のはんの中をうきあらく
[illegible]
愚按抄
孟
経
細
欟よかくれはとく

いとゞとうよ御ゆくよさばゆりかて[illegible]
人の[illegible]かろよけなとつくし[illegible]
られひとらこことすとそとゆかりまひとら
よ[illegible]せてろく
らうらくる御[illegible]あれがらよ[illegible]い
[illegible]
らうくみしもあくるどうれるされは[illegible]
のられさきよせけてやさんよそらあしく
げゆゐさ人のゆかりさ御しの[illegible]と
よそかくりしくりのさへりとも
世の人乃とおかうらけろめをとうくあるめ
まで[illegible]りをあ[illegible]まさらて[illegible]
られば今さらのはあざけれていて世乃
すゞきさをなりしさうしめしつりんく

[illegible]
細 源の心[illegible]に[illegible]
ありことをはまにもちし
かこし
所源のゆかりさ御と
て孟[illegible]
ゝ人 孝日 愚按抄 孟[illegible]
[illegible]世のゆかり
くとらくさ[illegible]源の
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

細 雪ふくに源之あしまふなり
それハいとりそえなれさう 師 それハ各別の事そうく恨まふべきまふもあくもとくとのろ
らとハさもなきまうとハ自然ようえんとく

ことそよとのつくしこまひてん 細 妖怪の中さうと 雪よりと
まなうけどときはんぐんなるなさうぐ
しきかりく 雪ぐなしで 中のしなやかひ
ま 細 奇境也 うしこをつまくよりのし 結所なれど
よ海さうのはいしへなどしまへど まめく 真実まちひ
しきさ海よもあくぬとうしるんあると
しをうれへきしぬべきことあやハうしろめ 分けとなくハた
さうハあらじとをもひるをしまへなど
日ひとひなぐさあすし 結 雪のいうつり 松の家ちと
つりりさうへよ いまとりつて 松と行こ

のなぐめかりしうこ雪多ぐれよ 人の法 孟浪と笑う
うさうを笑ゆうさりてこ雪 時くよつ雪
ても 人のうろをうろをめる 荒れ みぐら
のさうりよりと 冬の夜乃をめる月よ 雪
の知りあひうろ 空こそ あやしうさる
き地の男よしきて 此世のかりのことまで
ちやうくそ
ちひなぐされ ゆりしろきも 表さも 結しぬ
ゆりなれ すさ海じきさあしよいひをさ
れん 人のふあさくよしそ こそとゆうきあげ
ませ 結 月 いくまなくさしあて ひとろ色よ 雪月とともに白さ
きえ よこされさうよ 志 ゆ 結の海と 月れしう 前戦の
ひげうろぐらしう やまあもいと 此こ

時くよつ雪ても
海 妖よせひきされてわ
きうはつ時よつ雪くうろ
なこうろ
冬の夜のをめる月よ
海 いさうくてぞうあして
ん冬の月 雪のむふも中と
らさうあり 文 俳 細 面白 評
也 陽よくりくしうせり
つりりそふ 花と 此ともいう
でかい雪のよなる月を見
ざうんと家陰のよあ
もかやうのふるるへし
すきまぐきためしに
海 鶯日記 云 志 ハてのりう
の比月いとあるさに 西 俗志
ろうを人ふそてあなすき海
じ志なもの月ふもあるぬ
とりつりれど 雪とまろ
冬のうさりこせふよいの
月ふもそ 表なりけり
師 河海清女 細云 俗 雪
をひかり 俗 雪 子に 師 老
の月夜と云 朝なしと 細

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

飛孟諸秋の夜くまゐりあり
ふすまさあげさせ　細　香炉峯雪撥簾看の心
雪国　村上御門ノ
應和一年　閏十二月九日　令下
石勇志　飛鳥郷　常則
堆雪作蓬莱山
さ海ぐのあらみぐれき
細　ゝよりぐこゝとゝるべ
きを夜なりふりて
略しくるなるべし
飛一條　童はうぎをとへ
よき作れどそれどぬぎ
てあらめぐりきこゝろ
まやあらめはうまらぞき
ぬよりさぬる物
ゆびをどけなき　細　繚の
懸なるべし　飛　常はそれ海
の常と花ゆしはの夜計
せしまの深めく
わしはおもく　細　ゆしきさ
まや童気をおさなきを
無しくるさ海く花ゆさな
げなるとゆるし菜花ゆ繚
ふを此詞あり　師　ゆしはめき

うむとびて池の水もえといはれを
ぐきよ、ゆらしくべゆらして雪まろげ
をさせ給かしげなるすぐさしらつき
どを月よろへて　ゆかきやゝまなれる
がさ海ぐのあらめぐれきゆびしどけ
なきとのゐをがこなる海めいたるよ、こよ
なうあまれなかうものを思ふ志ろき座よ
はずしてりくるやしくなるいとけぎや
なりちいさきはもしたげくまんこ
ぴもしなよあふぎなどもゆとしてぐら
もけがゆゆしげなるいとゆわうまろ

てなり
あつぎなども　細　女の扇とりさすることは面をかくさんよめくされた扇などをもしてう
ちとけたるに　河　女房も式は名をかぶれ用之　檜扇之　孟　乱をかくさしめに
女は扇をさしてこし扇そのこまつふべきばかりの用にてはなきこと
かくつけがれと　細　力を入て
ゐよまろうきんとするに
かくつけは貪也　飛　ちから
をつれたるかたちなり
貪生　フツヤビト　桂仙窟
ふりしるげよ　ゆらふ
此言まろげ　緒をとりて
しくもふく　眼前よろ
やうのけしき面白き　書
さ海く
ひとせ中文の中文人は雪の
山　細　深の雲上へ詣り給へ
中文は薦雲也　雪山乃
ま河海花鳥まへてたる
伏見院後伏見院永仁の比
までは此ゆるさ法家の祀
祿あるをみくたり　花人以
なりとして御法せしとも
河桂菓子云ゆるものゝ余

ばさむとかくつけがれど　老の大はなりとれは知りしかと
えもなりしうごか
さそりぶめりがたへは東のつまなどよある
て、こゝろもとなげよりしふ　深朝之　とせ中文の
ゆまへよゆきの山つくられたるしよ
かりたるとなれど　花めづらしくもん
りなれこと後ちなしまつりしかれ　なみ
のゆりくまつけてを口かしうあらずを
あらかれいとけどとくりてなし給へ
深の者嘉は逢なひとかしてのまつく
くらしきはあらさ海をこゝろしなり
しことはなりしかどはゆしらひのわど

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

[illegible]

さひ侍るなど。昔今の御物かたりに夜ふけゆく。月いよいよすみて静に面白し。

女君

こほりとぢいしまの水はゆきなやみ
空すむ月のかげぞながるゝ

とを見いだしてすこしかたぶき給へるほど、似る物なくうつくしげなり。かむざしおもやうの、こひきこゆる人のおもかげにふとおぼえて、めでたければ、いさゝかわくる御心もとりかさねつべし。をしのうちなきたるに

かきつめて昔恋しき雪もよに
哀をそふるをしのうきねか

いり給ひても、宮の御ことを思ひつゝ大殿ごもれるに、夢ともなくほのかに見たてまつるを、いみじくうらみ給へる御けしきにて、もらさじとの給ひしかど、うき名のかくれなかりければ、はづかしう、くるしきめを見るにつけても、つらくなんとの給ふ。御いらへきこゆとおぼすに、おそはるゝ心ちして、女君の、こは、など、かくはとの給ふにおどろきて、いみじくくちおしく、むねのおきどころなくさはげば、おさへて、涙もながれ出にけり。今もいみじくぬらしそへ給ふ。女君、いかなることにかとおぼすに、うちもみじろかでふし給へり。

別 3
60
1

のくるや 細 各留ニ半座ヲ乗ス
花葉のかゝ 盃一と池中
華盡ク満ツ花萃ス惣ヘテ是ニ件ー
生人各留ニ半座ヲ乗ス華ー
葉待ツ我カ閣浮同行ノ人ヲ 五會讃
けきぬ人の 細 いかやうにしてひとく行ひなしとも生れはしりてこまつとしてしらハ
ミつせ川をしまさしらう

げきぬ人の 例の記者の詞と
ぞうりけるとや

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1

ガラス使用